新刊

「天皇学」入門ゼミナール

所　功著

皇室の永続を願って「ゼミ生」の輩出を

日本国にとって絶対に欠いてはならない最重要の御存在……、それが「天皇」である。現行の日本国憲法下にあっても「天皇」の御存在がなければ、日本国の立法・行政・司法の三権は、いづれもたちまち機能不全に陥り、国家としての機能は完全に停止（あるいは崩壊）してしまふことは、自明の理である。それでは「天皇とは何か？」。この問ひに正しく答へるためには、歴史・文学・思想・芸術・法制・政治・経済・教育など、多岐に亙って広汎な分野から理解することが必要だが、さうした総合的な学問領域を本書では「天皇学」（皇室学）として提起する。

広汎な物事を学び始めるにあたり、最初のアプローチ方法は人によってさまざまであらうが、とくに人文学系統にあっては歴史的分野から入ることが多い。その点、本書には総合学域である「天皇学」の入門教材（ハンドブック）として、百二十六代に亙る「天皇史」の概要がまとめられてをり有用である。

本論は「Ⅰ　古代――大和時代」「Ⅱ　上代――飛鳥・奈良・平安時代」「Ⅲ　中世――鎌倉・南北朝・室町時代」「Ⅳ　近世――江戸時代」「Ⅴ　近現代――東京時代」の順に、三十三篇の論攷で構成された「天皇史」の通史となってゐる。神武天皇から今上陛下に至るまでの百二十六代のうち、わが国の歴史の転換点に立たれた天皇、あるいは皇室の危機的状況を乗り越えられた天皇の御事績がまとめられてをり、ひじょうにわかりやすい。とくに、孝明天皇から今上陛下までの六代については、それぞれ一篇となってゐるので、今日の皇室のあり方についての理解が深められる。しかも、すべての論攷の末尾には、補注として記述の対象となった天皇（時代）についての最新の研究動静まで付け加へられてをり、本格的に「天皇学」を学ばうと志す場合の読むべき参考文献が明示されてゐる。

本論に続く「補論　歴代天皇の略伝」は、御歴代の御父・御母・御名・略伝・御陵について記され、本論を補完するとともに御事績を通覧することができる。また附録の「歴代天皇の略系図」は、単なる天皇系図ではなく后妃を通して姻戚（近現代は旧宮家の一部）にまで気が配られてゐるので、外戚の関係も理解しやすい。

「まえがき」「あとがき」から察すれば、皇室が直面する危機的な状況を打開し、皇室の永続を願って、多くの人々が「天皇学」の入門として「天皇史」を学ぶことが必要であるといふことを著者は訴へてゐる。国家存立の基盤たる皇室の永続を願ひ、本書を手に取って「天皇学」の「ゼミナール」の門を叩き、一人でも多くの「ゼミ生」が輩出されることを願ってをまない。

〈税込1980円、藤原書店刊。ブックス鏡守の杜取扱書籍〉

（皇學館大学研究開発推進センター准教授・佐野真人）